

テーラワード仏教の 僧衣の色

写真・文
加賀美充洋
Mitsuhiro Kagami



写真1 ミャンマー：ヤンゴンのシュエダゴン・パゴダにおける見目麗しい仏像

バンコクに住んで二年半が過ぎたが、最近ではメコン河周辺の国を訪れることが多い。そこで気づいたのが仏像の顔と僧侶の着ている僧衣の色が各国とも微妙に違うことである。筆者は、五戒（①生類を殺さない、②盗みをつかない、③みだらなことをしない、④うそをつかない、⑤酒を飲まない）も守れないし、とても敬虔な仏教徒とはいえないが、旅人としてその違いにふと気づいたのである。仏像の顔は、ミャンマーがやさしい顔、タイはちょっときつめの顔、そしてラオスがどことなくユーモラスな顔である。僧衣は、ミャンマーが赤黒い色、タイが黄色、ラオスは鮮やかなオレンジ色、カンボジアは朱色が多いといったところであらうか。

仏像はいろいろな種類の仏像があり、その顔は、彫り師の個性や材料またできた年代にも影響されるので違って当たり前かもしれない。例えば同じミャンマーでも荘厳で非常に気品に満ちた像（写真1）もあれば、大仰で福々しい像（写真2）もある。またラオスはどことなくユーモラスである（写真3）。見ていて楽しいのである。一方、僧衣の色はなぜ違うのであろうか。

仏教は仏陀によって紀元前五世紀ごろでき、仏陀入滅後一〇〇年ぐらいたちテーラワード（上座部）を含む部派仏教が成立、それは今のスリランカや東南アジアに伝わる南伝仏教となった。一方、部派仏教の保守化、形骸化に対して仏陀入滅後五〇〇年位たち改革派が現れ、後に中国や日本に伝わり大乘仏教と呼ばれることになった。こ



写真2
ミャンマー：マンダレー北部のインワにあるローカタラピエ・パゴダにある総大理石の仏像



写真4 ミャンマー：ヤンゴンのシュエダゴン・パゴダにいた青年僧



写真3 ラオス：ビエンチャンのルアン・パゴダで鎮座する仏像

のように部派仏教の方が古いし、元の仏陀の教えに近いものと言える。なお部派仏教は改革派から小乗仏教といわれるがこれは大乘仏教の（衆生を乗せる）大きな乗物に対して小さくて劣った乗物を指し、蔑称なので使わない方が好ましい。

さて僧衣はもともとどんなものであったのか。仏陀は出家した後、その衣は人々から喜捨されたぼろ切れをパッチワークして着ていたようだ。弟子たちが増えてきた段階で仏陀も衣装について統一した方がよいということ、人々がゴミとして捨てた布を用いてそれを洗濯し、野菜・植物ないし香辛料（ウコン、クミン、パプリカ、サフラン等）で染色して僧衣とした。僧衣の代名詞となった「サフラン・ローブ」はここから来ている（『The Buddha's Robe』, buddhism.about.com および『The Monastic Robes』, buddhanet.net 参照）。

タイのテーラワーダ仏教の出家僧については、憲法というべき守らなければいけない二七戒がある（石井米雄『タイ仏教入門』めこん、二〇〇六年）。そのなかのエチケット集に服装に関する作法がある（同六五〜六六頁）。僧侶の着る衣は三衣ある。腰から足首にかけて着る「下衣（パーリ語でアンタラーワーサカ）」、身体全体をおおう「上衣（ウッタラーサンガ）」、そして肩からかける「大衣（サンガティ）」である。大衣は寒い時に覆うものであるが、今では儀式などの時に左肩に乗せる装飾となっている。一般に寺院内では右肩を出していてもよいが、外出の際は肩を出しては



写真6 タイ：トンローの駅前で托鉢する僧侶



写真5 ミャンマー：ヤンゴン、池の魚に餌をやる成年と子供の僧侶



写真8 ラオス：ルアンプラバンにあるマク・モー寺院の屋下がり



写真7 タイ：サケット寺院に早朝托鉢からお供を連れて戻ってきた僧侶

いけないことになっている。またこれ以外に作業などの時に着るチョッキ（アングサと呼ばれる）がある。これは左肩からかけて右の脇の下で留めるだけのものである。さて僧衣の色であるが、日本におけるタイの碩学、野中耕一氏によると、色にも取り決めがあるとのことだ。ラーマ五世の異母弟で、偉大なる仏教学者のワチラヤーン親王の編集された仏教辞典に次のように出ている。「六種のもので染めるように言われている。①根、②樹木、③樹皮、④木の葉、⑤花、⑥果実。染められた衣の色は三蔵には書かれていない。色についても明記されていない。カーサヤ色とだけ書かれている。（これはシクシン科のヒルギモドキという木の液で渋色と訳される）しかし、次の色は禁じられている。藍色、黄色、赤色、赤紫、橙色、桃色、黒色……しかし、保証されているのは赤色の混じった黄色、またはくすんだ黄色である。ジャックフルーツ（仏教用語では波羅蜜を当てる）の心材はグラックと言ひ、黄色で煮汁は染料にする。」こうしてみるとどうも渋柿色というか赤黒い色が僧衣の正式な色らしい。

メコン河流域を旅していると、我々が失ったものに会えるので心が和む。特にミャンマーやラオスは優しい人々や美しい風景が多い。ミャンマーはユネスコの世界遺産級の遺跡がたくさんある。中でもバガンの仏塔群は秀逸である。この流域は本当にテラワータ仏教が生活に根ざしている。さて僧衣の色であるが、ミャンマーの僧は渋柿色を着ている（写真4と5）。ミヤ



写真9 ラオス：ピエンチャンのシムアン寺院において弟子を連れれた高僧



写真12 タイ：ツーショット（聖・俗の対比）



写真11 カンボジア：プノンペン、サラワン寺院の青年僧、右肩に入墨がある

ンマーはまだ近代化こそ遅れているが、しっかりと仏陀の伝統を守っているようだ。タイは、規則のように大体において黄色系統が多いように見受ける（写真6と7）。またラオスは鮮やかなオレンジ色である（写真8と9）。またここではアングサと呼ばれる作業衣をきている僧にも出会った（写真10）。そしてカンボジアは明るい朱色である（写真11）。しかし、ミャンマー以外でもたまに赤黒い僧衣を纏った僧侶を見かけることもあるし、タイでもオレンジ色の僧衣を見かけるので真相はわからない。テラワダ僧に階級みたいなのがあつてそれにより着る僧衣の色が違うとは思えない（日本では最上位が紫色と聞く）。考えられるのは、僧衣の布は元々在家の人々のお布施、喜捨が基本なので、在家の人は僧衣の色なんて決まっているとは知らずにそれらしい色の布を僧侶にあげているうちに微妙に色が違ってきたのである。だがこれはあくまで筆者の想像なので、どなたか知っている方がいたら教えていただければ幸甚である。最後に、筆者と高僧のツーショットを掲げておく（写真12）。二七戒を守る出家僧の表情はなかなか味わい深い。なおテラワダ仏教の真髄についてさらに知りたい方は、ポー・オー・パユットー著、野中耕一翻訳『テラワダ仏教の実践―ブツダの教える自己開発』（サンガ社、二〇〇七年）をお勧めする。

（かがみ みつひろ／バンコク研究センター所長）